



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歡のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」はその証言館です。

私の稀観本ノート その2
山村生活譜を綴る紀州熊野の
宇江敏勝さん
館長 椎窓 猛

○和歌山県熊野に住み、山林労働につとめながら作家活動を続けている宇江敏勝さんから、「自分史図書館」に「昭和林業私史」の寄贈を受けた。事務局の東さんからのその報に、私は宇江さんの友情に胸が熱くなるのを覚えた。○宇江さんは熊野の高校卒業後、18歳から紀州の山で炭焼き、植林、伐採をしながら、山暮らし、そして変貌の烈しい山村の現実を鋭く直視、書きつづける貴重な山林森の作家である。○宇江さんと便りを交わすようになって幾年月を重ねたか。去年の師走には——ご高著『ムササビ』拝受いたしました。しみじと拝読。一つのメルヘンが多くの人々のあいだであたためられている様子がうかがわれました。「自分史図書館」というユニークな存在も知ることができ、私の本も一冊納めさせていただくことにしました。○宇江さんの本は新宿書房から、「森をゆく旅」「山びとの動物誌」「樹木と生きる」「若葉は萌えて」など10数冊。福音館から「木と人間の宇宙」の2巻。○「山の斜面にかけて、耕作放棄された田圃の跡があり、いまは冬枯れた雑草に埋もれている。だから山仕事をする人もなく、私ど



ものような遠くの労働者を傭っているのだ。○こんな一節を読んでもニッポン中山間地のきびしい現実がうかがわれる。

天雲の向伏す極みその涯にも生きとし生けるものの歌あり
皇太后陛下御誕辰御慶題「つみ草」(平成四年)
つみ草の蓬ほのかに温かく薬のごとき匂ひありけり
我が庭の枝垂れ桜は散り初めぬ妻の退院近しと思う日
花の雨上りて帰る夜半の街ひどく酔ひたる人の影ゆく
枝先に秀と萌え出でし楓の芽この小さきより今年も始まる
神楽舎に春の陽さしの射し来れば雀らの声朗かに聞こゆ

天雲の歌

谷 蟻生



福岡のわらべ歌

友野晃一郎 編著

おろろん ころろん 子が泣くば
い 泣かせちゃおくまい 乳飲ま
しゆ 泣かするほどなら 守りゃ
いらぬ ねんねん ねんねん ね
んねんばいー (矢部の子守歌)

歌人 谷蟻生氏とは——



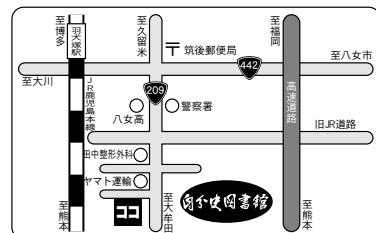
『谷蟻』たにぐくととは、蛙の古語。『万葉集』にも出て来る由緒ある言葉。筑後八女一帯では「タンガク」と呼ぶが、生きとし生けるもの谷蟻のように歌いたいと筆名谷蟻生。本名は、中島宝城先生。昭和10年生まれ。福岡県八女出身。九大卒業後、宮内庁におつとめ。歌会始の儀等の宮中の儀式と雅楽総括を歴任の歌人である。

歌人としても『山彦の歌』『天雲の歌』『タンガクの歌』など歌集が編まれている。

郷里に『自分史図書館』設立の報を知られるや、いち早く歌集5冊、それに『宮中歌会始』戦後50年の歩みを集大成された冊誌をご恵贈。感謝の意をこめて歌を紹介し、先生の望郷の思いをここにお伝えしたい。

友野晃一郎氏は、現在久留米市在住だが、八女、とくに上陽町にゆかりの人。県下でも随一の民俗音楽研究家として高名。この「福岡のわらべ歌」は、福岡、北九州、筑豊、筑後の生活圏をもとに採集されたもの。「わらべ歌」とは、子どもの心のふるさと、貴重な文化遺産、それが時代の流れと共に、子どもの遊びも一変してきたが、忘れてならない美しい夢がここには収蔵されている。

開館 午前9時～午後5時 入館無料
休館 土曜・日曜、祝祭日、年末・年始、その他休館することがあります。予めご確認下さい。





『父の遺稿』

高橋甲四郎

拙著「父の遺稿」を私自身が紹介するよりも、私宛に届いた「読者の感想」の一部を紹介するほうがよ

り具体的だと思ひ、そのようにさせていただいた。

「『事実は小説よりも奇也』を地で行く面白さと、著者のお父上に対する強い愛情を感じずにはいられませんでした。(中略)出版

に漕ぎつけられたときの喜びはいかほどだったでしょうか。その感激が痛いほど伝わってきました」

(久留米付設高校勤務・数学担当・轟寿男)

「取り上げられている人々が、生き生きと描かれ、引きこまれました。学問のありようについて考えさせられる箇所もありました」

(考古学会員・北九州在住・柳澤みどり)

「感激を持って読ませていただきました。もっと早い時期に、貴君が高橋博士のご遺稿出版についてご苦勞されていることを知り得たならば、何かお力になることができたらうと残念に存じております」

(東京大学名誉教授・黒木町名誉町民・松尾孝嶺)

「高橋昇さまの、一万三千枚にもなる遺稿、それを20年後に発見された高橋甲四郎さまの熱意と熱気、それにかかわった人々の熱意と根気。人間って、こんなに頑張れるものかと本当に尊敬いたします」

(ハングルを学ぶ会・久留米市在住・平山久子)

「新聞を読んで『父の遺稿』を知り、早速購入して読みました。改めて著者の長年のご苦勞を知ることができました」

(福岡県立高校在勤・数学教師・堤静雄)

守保教授の自分史 ワンポイント講座 第2回



長田弘氏の桑原武夫賞受賞作の『記憶のつくり方』という詩集の「あとがき」

に「じぶんの記憶をよく耕すこと。その記憶の庭にそだってゆくものが、人生とよばれるものなのだと思う」という一節があります。現在の自分の土壌とも言える「記憶」を「よく耕すこと」によって育てていくものが「人生とよばれるもの」とする長田氏の優れた洞察には、思わず納得してしまいます。

長田氏のことばから、私は、吉泉守峰氏ご恵存の句集『雪間の草』の中の、まさに歌俳による自分史の体をなす「あとがき」を思い起こしました。「元満州生まれの満州育ちで(中略)関釜連絡船で帰国して、父の実家での間借り生活、いつもがまんもし通し」の窮乏生活の中、旧制中学進学をめぐる親族会議まで開かれ「叔父に殴られ」た衝撃を、吉泉氏は「進学を親族



会議に諮られり親不孝者と叔父に殴られ」と詠んでいます。作者は、この記憶を、不遇な少年期の過酷な体験として隠蔽せず、「じぶんの記憶をよく耕すこと」を通して、「ですから、エンピツ一本でもいただくのは本当にありがたいことです。現在の私の謝恩と忍耐(打たれづよさ)の性格は、この頃から自然と培われたものでしょう」と、現在の自分の個性を形作っている貴重な体験として捉えるのです。慧眼です。このように「記憶の庭」を自ら耕していくことで、自分の人生がより良く育まれていくのですね。(あぼう・ひろし 群馬県立女子大学教授)

受贈図書紹介 ③

田主丸ん本	田主丸町
歌集 両手握れば	大坪 公子
なにか変だばくは狂っているのかな	田中つゆ子 田主丸町
大牟田の干拓と埋立	安部 靖 大牟田市
句集 青田風	中島 藤喜
私の絵手紙日記	原田 寛子 福岡市
小さな花	綽 真唯子
他人さえもいとおしく	宮城 颯
うちの子どうかしら	大城 清
城島町町村合併50周年記念誌	城島町役場
筑後柳河藩の戊辰戦争	鬼童 忠恕 柳川市
人生と念仏	寺山 文融 瀬高町
歌集 天空の歌	中島 宝城 東京都
白鳥の歌	中島 宝城 東京都
谷蟻の歌	中島 宝城 東京都
山彦の歌	中島 宝城 東京都

宮中歌会始	中島 宝城 東京都
癌告知のあとで	鈴木 章子
歌集 満月の夜	蓮尾加寿子
私の趣味	田所 敏明 北九州市
旅・旅行そしてツアー	田所 敏明 北九州市
家族のきずな	末次 鎮衣 筑紫野市
浦野隆夫の野球人生	浦野隆太郎 大分市
六歳 槍ヶ岳に登る	虻川 圭實 筑後市
朝の読書がもっと楽しくなるアイデア集	穴見 嘉秀 福岡市
山頭火・虚子・文人俳句	齊藤 英雄 筑後市
まあちゃんの朝市物語	小瀬 峻一 鹿児島市
みやこという宇宙	園田 英弘 京都市
平家物語	高良大社 久留米市
久留米藩史覚書	古賀 幸雄 久留米市
向陵一高百三十年記念	一高同窓会 東京都
ヒロちゃん空を飛ぶ	永尾 廣久 大牟田市